

基礎看護学実習 I における技術体験 —実習要項見直し前後の比較—

The Analysis of Technical Experience in Fundamental Nursing Practice -Comparison before and after Review of Practice Outline-

三木 園生, 小山 英子, 永田 美和子, 上星 浩子

要 約

本研究の目的は、基礎看護学実習 I の目的・目標・方法見直し後の8期生が、どのような技術をどの程度経験できているか、また、見直し前後の技術体験の違いの有無を明らかにすることである。対象は、基礎看護学実習 I を終了した一年生85名で、厚生労働省の看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書による「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」に基づき作成した本学の技術体験項目のうち、水準1に焦点をあて、技術体験状況を分析し、見直し前の7期生と比較した。その結果、1. 「必ず実施する援助」「機会があればできるだけ実施したい援助」の18項目すべてにおいて、体験率が増加していた。2. 60%以上の学生が体験できた技術は、前回の4項目（バイタルサインの観察、清拭、療養生活環境調整、移送）から10項目（バイタルサインの観察、食事介助、清拭、療養生活環境調整、ベッドメイキング・リネン交換、スタンダードプリコーション、部分浴・陰部ケア、体位変換、移送、寝衣交換など衣生活援助）に増加した。この結果は、目的・目標・実習方法の見直しとそれに基づく教員・指導者間の連携の強化によるものと考えられる。

キーワード：基礎看護学実習，看護技術水準1，技術体験，看護学生，実習指導

はじめに

医療技術の高度化、専門化が進み、一方で医療安全の重要性が緊急の課題となっている臨床現場では、新卒看護師の臨床看護実践能力の向上が強く求められている。本学においても、社会に役立つ有能な看護師を送り出すために技術教育の強化は重要な課題である。基礎教育における看護技術の習得において、臨地実習での実施体験はきわめて重要である。また、1・2年次の基礎看護学実習で生活援助技術を身につけることは、その後段階をふんで領域別の看護実践力を習得する土台となる。このことをふまえて、2004年には、基礎看護学実習 I での技術体験の実態を学生の記録から分析・検討した。その結果、学生全員が体験できた技術はバイタルサインの観察のみであり、技術体験が少ないこと、急性期、慢性期などの実習病棟の特徴や学生個人によって体験項目や体験回数に差が大きいことが明らかとなった。

開学以来、日常生活援助技術の体験（実施と見学）は基礎看護学実習 I の主な目標のひとつであったが、上記の結果から、基礎看護学実習要項（基礎看護学実習 I の目的・目標・方法）の見直しが必要であると考えられた。

そこで、2005年3月の8期生の実習では、実習目的・目標を見直すとともに、「必ず実施する援助」・「機会があればできるだけ実施したい援助」を学生・教員・臨床指導者に明確に示すように変更した。本研究では、基礎看護学実習 I 要項の見直し前（7期生）の結果¹⁾と、見直し後（8期生）とを比較検討し、技術の体験状況にどのような変化があるかを明らかにすることとした。

基礎看護学実習 I の概要については、以下に示す。

1. 見直し前（7期生）の目的・目標

1) 目的：看護の対象であるクライアントが医療施設においてどのような健康上の問題をもって生活しているか、その日常生活援助をどのように看護活動

が支えているかを、併せて見学・体験することで学習効果をあげる。

2) 目標：

(1) 入院患者の生活環境を知り、どのようなニーズを持って日常生活を送っているかがわかる。

(2) 患者の基本的ニーズを満たすために必要な日常生活への援助を見学・体験する。

(3) 患者に関わる保健医療チームと看護チームの関連を知る。

(4) 患者との直接的な関わりを通して看護に関心をもてる。

2. 見直し後（8期生）の目的・目標

1) 目的：看護の対象である患者および患者をとりまく環境を理解し、日常生活の援助技術を実践する。

2) 目標：

(1) 病院の機能・概要を理解できる。

(2) 入院患者の生活の場を理解できる。

(3) 患者とコミュニケーションができる。

(4) 患者の基本的ニーズを満たすために必要な日常生活の援助を実施できる。

(5) 患者との直接的なかわりをとおして看護に関心をもてる。

3. 実習時期：1年次3月

4. 実習時間：45時間

5. 実習方法：指導にあたる看護師とともに行動し、援助を実施する。

研究目的

1. 8期生の基礎看護学実習Ⅰにおける、基礎看護技術の体験状況（項目・回数）を明らかにする。

2. 基礎看護学実習要項の見直し前（7期生）後（8期生）の体験項目および体験回数の違いの有無を明らかにする。

研究方法

1. 対象：

1) 基礎看護学実習Ⅰを体験した本学看護学科第8期生94名（1年生）に、倫理的配慮として実習終了後・成績発表後に、研究の目的・趣旨及び評価には全く関係ないこと、個人は特定されないこと等を文書及び口頭で説明し、同意が得られた85名を対象とした。

2) 7期生85名に対して行った基礎看護学実習Ⅰにおける技術体験の分析結果¹⁾

2. 期間：2005年3月2日～4日。

3. 方法：構成的質問紙法

1) 厚生労働省の「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」で示された「臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準」に基づき、本学の技術体験項目表を作成。

2) 1) の技術体験項目表に、学生が1日の実習終了ごとに正の字で記入した体験数を、水準1に焦点をあて、分析。

3) 水準1の技術48項目中、基礎看護学実習Ⅰの実習方法に示した、「必ず実施する援助」および「機会があればできるだけ実施したい援助」（資料1）の18項目に焦点をあて、前年度の7期生と比較。

資料1 基礎看護学実習Ⅰにおいて実施させたい援助（8期生）

| 項目 | 必ず実施する援助 | 機会があればできるだけ実施したい援助 |
|---------------------|----------|--------------------|
| 1. バイタルサインの測定 | ◎ | |
| 2. 環境調整 | ◎ | |
| 3. ベッドメーカーキング・リネン交換 | ◎ | |
| 4. 清拭 | ◎ | |
| 5. 部分浴他 | ◎ | |
| 6. 入浴介助 | ◎ | |
| 7. 洗髪 | ◎ | |
| 8. 口腔ケア | ◎ | |
| 9. 整容 | ◎ | |
| 10. 寝衣交換 | ◎ | |
| 11. スタンダードプリコーション | ◎ | |
| 12. 体位変換 | | ○ |
| 13. 食事介助 | | ○ |
| 14. 便器・尿器の使い方 | | ○ |
| 15. オムツ交換 | | ○ |
| 16. 移送 | | ○ |
| 17. 歩行の介助 | | ○ |
| 18. 電法 | | ○ |

研究結果

1. 8期生の体験状況

1) 全体的にみた技術の体験状況

学生85名の体験結果は（表1）、バイタルサインの観察が85人（100%）で、唯一全員が体験していた。以下、60%以上の学生が体験した技術は、食事介助74人（87.1%）、清拭73人（85.9%）、療養生活環境調整70人（82.4%）、ベッドメーカーキング・リネン交換70人（82.4%）、スタンダードプリコーション66人（77.6%）、部分浴・陰部ケア62人（72.9%）、体位変換60人（70.6%）、移送（車椅子）57人（67.1%）、寝衣交換など衣生活援助54人（63.5%）の9項目であった。

体験率60%未満は、洗髪43人（50.6%）、オムツ交換38人（44.7%）、整容33人（38.8%）、歩行・移動の介助27人（31.8%）、入浴介助20人（23.5%）、電法等身体安楽促進ケア18人（21.2%）、口腔ケア13人（15.3%）であり、体験率10%以下は、便器・尿器の使い方の1項目のみであった。

表1 1回以上実施体験のある学生数（7期生と8期生の比較）

| 体験内容 | 8期生 | | 7期生 | |
|----------------|-------|-------|-------|-------|
| | 体験学生数 | % | 体験学生数 | % |
| バイタルサインの観察 | 85 | 100.0 | 85 | 100.0 |
| 食事介助 | 74 | 87.1 | 34 | 40.0 |
| 清拭 | 73 | 85.9 | 78 | 91.8 |
| ベッドメイキング・リネン交換 | 70 | 82.4 | 40 | 47.0 |
| 療養生活環境調整 | 70 | 82.4 | 62 | 72.9 |
| スタンダードプリコーション | 66 | 77.6 | 2 | 2.4 |
| 部分浴・陰部ケア | 62 | 72.9 | 71 | 83.5 |
| 体位変換 | 60 | 70.6 | 52 | 61.2 |
| 移送(車椅子) | 57 | 67.1 | 69 | 81.2 |
| 寝衣交換など衣生活援助 | 54 | 63.5 | 53 | 62.4 |
| 洗髪 | 43 | 50.6 | 42 | 49.4 |
| オムツ交換 | 38 | 44.7 | 58 | 68.2 |
| 整容 | 33 | 38.8 | 3 | 3.5 |
| 歩行・移動の介助 | 27 | 31.8 | 19 | 22.4 |
| 入浴介助 | 20 | 23.5 | 22 | 25.9 |
| 電法等身体安楽促進ケア | 18 | 21.2 | 6 | 7.1 |
| 口腔ケア | 13 | 15.3 | 26 | 30.6 |
| 便器・尿器の使い方 | 6 | 7.1 | 5 | 5.9 |

2) 学生個人別にみた技術の体験状況（表2）

18項目中10項目以上を体験した学生は51人（60％）で、このうち最多は、15項目を体験していた2人（2.4％）であった。次いで、14項目6人（7.1％）、13項目5人（5.9％）、12項目11人（14.1％）、11項目13人（15.3％）、10項目14人（16.5％）であった。一方5項目未満の学生は0人（0％）で、残る34人（40％）は5～9項目を体験していた。

表2 個人別の体験項目数と体験回数の8期生と7期生の比較

| 体験項目数 | 8期生 | | 7期生 | |
|-------|-----|-------|-----|-------|
| | 学生数 | 体験回数 | 学生数 | 体験回数 |
| 15 | 2 | 49～50 | - | - |
| 14 | 6 | 17～48 | 1 | 26 |
| 13 | 5 | 20～53 | 1 | 18 |
| 12 | 11 | 14～65 | 3 | 17～20 |
| 11 | 13 | 15～61 | 4 | 22～34 |
| 10 | 14 | 18～77 | 7 | 12～36 |
| 9 | 18 | 16～46 | 2 | 17～19 |
| 8 | 9 | 13～22 | 10 | 9～13 |
| 7 | 2 | 22～30 | 16 | 9～17 |
| 6 | 4 | 10～15 | 17 | 7～17 |
| 5 | 1 | 10 | 12 | 6～18 |
| 4 | - | - | 7 | 6～16 |
| 3 | - | - | 4 | 4～6 |
| 2 | - | - | 1 | 3 |

また、個人別技術の体験項目数と体験回数の関係を見ると、体験項目数が10項目以上の学生の体験回数は、14回から77回と開きがあり、5～9項目を体験した学生の体験回数も10回から46回と開きがみられた。

個人の体験状況をさらに詳細にみていくと、15項目と最も多かった学生A・Bは、体験回数がそれぞれ50回・49回であり、その内訳は、学生Aはスタンダードプリコーションが20回と最も多く、体位変換5回、食事介助・バイタルサインの観察各4回、療養生活環境調整・歩行・移動の介助各3回であった。学生Bは、学生A同様、スタンダードプリコーションが28回で

最も多く、次いでバイタルサインの観察4回、療養生活環境調整3回、食事介助、部分浴・陰部ケア各2回であった。その他、体験回数が77回と最多の学生は、スタンダードプリコーションが60回と1つの項目に集中しており、その傾向は他の学生にも多くみられた。

一方、体験項目が5項目と最も少なかった学生Cは、体験回数も10回と最少であり、バイタルサインの観察6回、移送（車椅子）、部分浴・陰部ケア、清拭、洗髪が各1回で、スタンダードプリコーションの記載はなかった。同様に体験回数が10回と最小の学生Dは、体験項目数が6項目であり、スタンダードプリコーションの記載はなく、食事介助4回、移送（車椅子）2回、おむつ交換、体位変換、入浴介助、バイタルサインの観察各1回であった。

考 察

1. 全体的にみた技術体験状況についての要項見直し前（7期生）後（8期生）の比較（図1，表1）

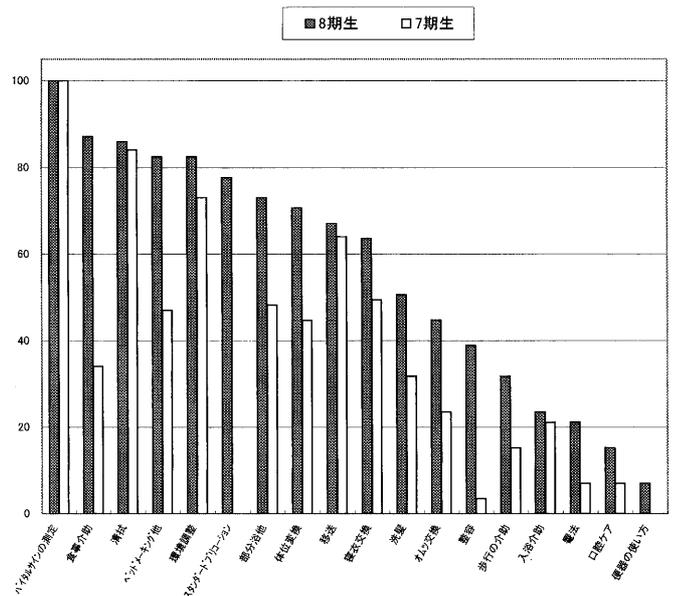


図1 技術体験状況

本学が基礎看護学実習 I で実施させたい援助技術としてあげている18項目は、いずれも日常生活の援助、観察や安全確保などの基本的な技術であり、これらの項目は必ず看護師・教員の指導・監視のもとで実施することを原則としている。

分析の結果、8期生全員が体験できた技術は7期生¹⁾と同様バイタルサインの観察1項目のみであったが、60％以上の学生が体験できた項目は、7期生の4項目から、8期生では10項目に増加した。バイタルサインを除く9項目について前回と比較すると、食事介助は、前回の34.1％が87.1％に、ベッドメイキング・リネン

交換は47%が82.4%に、部分浴・陰部ケアは48.2%が72.9%に、体位変換は44.7%が70.6%へといずれも大幅に増加していた。また、清拭は84%から85.9%に、療養生活環境調整は73%が82.4%に、移送は64%が67.1%に、衣生活援助は49.4%から63.5%に、それぞれ増加していた。特に清潔・衣生活援助技術においては、清拭、部分浴、入浴介助、洗髪、口腔ケア、整容、寝衣交換のいずれかを必ず体験する項目としたことで、学生全員がいずれかの援助技術を体験することができていた。

また、全体の実施率は少ないものの、入浴介助(21.1→23.5%)、歩行・移動の介助(15.3→31.8%)、整容(3.5→38.8%)、オムツ交換(23.5→44.7%)、洗髪(31.8→50.6%)などいずれも増加していた。口腔ケア・髻法等身体安楽促進ケアは、前回は共に7%であったが、それぞれ15.3%、21.2%と、どちらも増えていた。

一方、前回の調査において体験率が0%であったスタンダードプリコーションは、77.6%に急激に増加した。この要因として、前回はスタンダードプリコーションの概念理解が不十分であったためと考えられ¹⁾、講義や実習において知識と実践を統合していく指導を強化したことによる変化であると考えられる。しかし、中には体験回数を0回と記載した学生が19人(22.4%)みられた。このことは、未だスタンダードプリコーションの概念を正しく理解できていない学生が存在していることを示唆しており、今後も引き続き指導を強化していく必要性が明らかになった。また、前回の体験率が0%であった便器・尿器の使い方は7.1%であった。

以上のように18項目の全てにおいて実施体験率が増加したのは、8期生の実習開始にあたり基礎看護実習Ⅰ要項を見直し、「必ず実施する援助」、「機会があればできるだけ実施したい援助」を明示したことによって、学生や担当教員への意識づけはもちろんのこと、病棟の臨床指導者もこのことを踏まえた意識的な指導をした結果によると考えられる。このことは、多様な実習環境下においても、実習の目的・目標・方法を明確にし、教員・指導者間の連携を強化することによって、技術体験を増加し、学習の機会を広げることが可能であることを示唆している。

2. 学生個人別にみた技術体験状況についての要項見直し前(7期生)後(8期生)の比較(表2)

体験項目数の最多は、7期生²⁾が14項目、8期生15項目であり、ほぼ同様の結果であった。一方、体験項

目数の最小は、7期生の2項目に対して、8期生は5項目と増加していた。体験回数については、7期生は3回から36回、8期生10回から77回であり、7期生・8期生のいずれも個人差が大きいことは、同様であった。

基礎看護技術の習得方法として、科学的根拠に裏付けられた技術の実施を実習で積み重ねていくことが重要であるが、前回²⁾および今回の結果をみると、体験項目が多い学生は、比較的バランスよくさまざまな技術を体験できているのに対し、体験項目の少ない学生は、項目数・体験回数ともに少ないという結果であった。すなわちこれらの少ない学生は、多い学生に比し、学習の機会が得られない状況にあったと言える。

基礎看護学実習Ⅰは、6病院18病棟に分かれて実施し、いずれも、急性期もしくは慢性期の病棟であり、技術を体験するか見学するかは、患者の状態、学生の準備状況により、指導者・教員が判断している。7期生の結果では、体験項目の多い学生は慢性期病棟に集中し、また、体験項目の少ない学生は特定の病院に集中していたことから、患者の状態、病棟の指導者、教員の考え方や指導体制、学生の準備状況などが、体験の個人差を生んだ要因と推察される。今回の調査では、病院・病棟別の分析までは実施していないが、この結果は、先行研究で明らかになった、体験による学習の動機付けや、体験を重ねる中で得た充実感、達成感、自己成長の実感などが得られないまま実習を終了した学生が8期生にも存在したことを示唆している。これらのことから、基礎看護学実習Ⅰでの技術体験の少ない学生については、基礎看護学実習Ⅱに向けて、事前に技術の習得状況を確認し、指導を強化する必要性が明らかになった。

結 論

1. 8期生全員が体験できた技術は、バイタルサインの観察のみであった。
2. 60%以上の学生が体験できた技術は、7期生の4項目(バイタルサインの観察、清拭、療養生活環境調整、移送)が、8期生では10項目(バイタルサインの観察、食事介助、清拭、療養生活環境調整、ベッドメーカー交換・リネン交換、スタンダードプリコーション、部分浴・陰部ケア、体位変換、移送、寝衣交換など衣生活援助)に増加した。
3. 基礎看護学実習の見直し後は、「必ず実施する援助」・「機会があればできるだけ実施したい援助」の18項目すべてにおいて、体験率が増加していた。

引用文献

- 1) 小山英子ら：基礎看護学実習 I における技術体験の分析. 桐生短期大学紀要, 15:1-6, 2004.
- 2) 三木園生ら：基礎看護学実習 I における看護技術体験状況の分析. 日本看護学教育学会第15回学術集会講演集, 191, 2005.

The Analysis of Experiences in Practicing Clinical Technique in the Fundamental Nursing Science Practicum

-Comparison before and after Review of Practice Outline-

Sonoo Miki, Eiko Koyama, Miwako Nagata, Hiroko Joboshi

Abstract

The aim of this study is to reassess the objectives, the goals, and the method for the fundamental nursing science practicum (I), to verify what types of the skills and how far students have experienced the skills, and to identify the differences in the experiences of skills between the first grade students who completed the practicum (I) after review and the second grade students who completed the practicum (I) before review. We focused on Standard (I) of practical items of our school's to analyze skills that the students experienced in the nursing practicum. Those items had been drawn based on "The standard for the fundamental nursing skills in the clinical training" described in the investigative commission report of Health, wealth Labor Ministry, which is related to the nature of the education for nursing techniques in the fundamental education. The findings were as follows;

1. The objectives, the goals, and the methods for the fundamental nursing practicum (I) were reassessed. Through this assessment, the coefficients of the experiences increased in the all 18 items for practical program including "Cares without any fail to be practiced", "Cares that are desired to be practiced if possible".

2. The techniques, that were experienced by 60% of the students, increased from 4 items (vital sign check, dry bath, adjustment of the environment of life in hospital, patient transfer) to 10 items (vital sign check, assistance with meals, dry bath, adjustment of the environment of life in hospital, bed making, linen exchange, standard precaution, partial bathe, pubic care, changing position, patient transfer, exchanging clothing including gowns).

These improved results are considered due to the reassessment of the objectives, the goals, and the methods, along with the enhanced partnership between teachers and instructors based on the findings of this analysis.

Keywords: Fundamental nursing practice, Nursing technology level 1, Technical experience, Nursing student, Practice work